

にトルコ語 *istami* の音譯で、多も孰も同じ *sa* の音を寫したものである。誕は今音 *tan* で延は廣韻を始めとしてみな *yen* であるが、古くは延に別にまた *tan* の音の有つたであらうと思はれるのは、曾てヒルト (Hirth) 氏^⑤も論じたやうに、啞誕誕誕誕など延を音基とした文字が皆 *tan* であることから推知出来る。蚕の如きもまた其の一例である。それで康拂多延といふのは康國の *Fur'sta-dan* と見るべきで、當時石城鎮に植民した康國人の首領なる摩尼教の僧侶であつたと考へられる。此の外にも康國人は諸方に植民したものでらしく、前にも引いた如く、吐魯番地方にもアルタイ地方にも其の證跡がある。此等のソグド人中にはまた摩尼教を奉じたものが少くなかつたであらう。かゝる點からも回鶻に入つた摩尼教僧侶にソグド人があつたらうと推察することは出来るが、更に此の事を強く證據立てるのは、前に記した回鶻可汗の紀功碑に、漢文の外に突厥文とソグド文との記事のある事である。ソグド文は甚しく磨滅して居て、文意を探る事甚だ困難ではあるが、曾てミュラー氏 (F. W. K. Müller) が其の一部分を讀んでから、今日では何人も之をソグド文字で書いたソグド文たることを疑ふものはない。漢文の文面には建碑當時までの歴代可汗の名と著しい業績とを記して居るが、その中特に摩尼教の回鶻に傳へられ、信仰せられた事に就いては詳細の記事がある。而して碑の一面の記事は、摩尼教の盛に行はれ、また摩尼教僧侶を東方に出して居る證據のあるソグディアナの文字と言語とで記されて居る事から考へると、何人も此のソグド語の文面が、當時回鶻に留つたソグディアナの摩尼僧の手に成つた事を疑ふものはない。果して然らば回鶻に於て前述の如く政治上重要な位置を占めた此の教の僧侶が、即ちソグディアナの人であつた事も、また自然に認められることと思ふ。尤も摩尼教なるものは、當時たゞ獨りソグディアナの人によりてのみ信ぜられたものではない。玄奘三藏の大